

ハディース入門 (5) - ダイーフ

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

はじめに

前回に引き続き、ダイーフに関連する残りの主要項目を解説する。

⑥**ムンカル**：「否認」という意味で、「暗記が不確実、あるいはその他の何らかの問題点を持つ伝承者が見出されるハディース、または信憑性の低い伝承者が関与し、信頼できるハディースとの間に差異が認められるハディースを指す。ムンカルは、ダイーフの中でも極めて劣悪なものの一つとみなされている。アルバルディーは「伝承経路が一つしか存在せず、その信憑性を確認・裏付けることができないハディース」をムンカルとしているが、その具体例は何も挙げていない。一方でイブン・サラフをはじめとするハディース原論学の主流派は、以下に述べるシャーツと同義に用いている。ハディース学者たちの間では「ムンカル」という語は否定的な意味で、単独では破棄されたり、疑義が持たれたりするハディースを指す用語として広く用いられている。

ムンカルの「信頼できるものと差異が認められるハディース」の例として、「ムスリムが不信仰者を相続することはなく、不信仰者がムスリムを相続することもない。」というマーリク・イブン・アナスが伝えるものがある。マーリクだけはこのハディースを預言者ムハンマドからウサーマ・イブン・ザイドを経てウマル・イブン・ウスマーンに伝えられたとしているが、アンナサーイーはこのハディースの伝承経路について、「ウサーマ・イブン・ザイドを経てアムル・イブン・ウスマーンに伝えられた」としている。『サヒーフ集』の編著者であるムスリムもアムル・イブン・ウスマーンとしている。ここで問題になっているウマル・イブン・ウスマーンとアムル・イブン・ウスマーンは兄弟であり、双方共に信頼できる伝承者とみなされている。またマーリクも4大法学派の一つマーリキー派の学祖であるように信頼できる人物である。ここでマーリクが伝承者の名前をウマル・イブン・ウスマーンとした根拠については、それを裏付ける証拠がないため、このハディースはマーリクが収録したものについてのみムンカルとの判断が下されている。ムスリムはこの件について伝聞または収録に際してのマーリクの過ちを指摘しているが、アンナサーイーは「マーリクがウマル・イブン・ウスマーンから伝え聞いたことは事実であるが、マーリク以外にはそれを伝えていない。」としている。また単独でハディースを伝えている場合には信憑性に揺らぎのある伝承者が伝達に関わっているハディースもムンカルとみなされる。アンナサーイーやイブン・マージャが伝える『緑色の(まだ熟していない)ナツメヤシの実を、乾燥したものと一緒に食べなさい。悪魔がそれを見れば怒り出します。』というハディースはその一例である。このハディースの伝達においてアブーズカイル・ヤヒヤー・イブン・ムハンマドというバスの伝承者が単独で伝えているが、多くのハディース学者はこの人物を疑問視している。

⑦**アフラード**：「単独」を意味するアラビア語「ファルド」の複数形で、通常は「完全アフラード」と「特殊アフラード」の二種類に分類される。「完全アフラード」は後出のシャーツと同義であり、「特殊アフラード」は信頼できる伝承者のみによって伝えられたハディース、あるいはある特定の地域においてのみ伝えられたハディースという意味で、ガリーブと同義で使われる。例えばある伝承経路について、その伝承者の全てがマディーナ在住の人物であったり、または預言者から数世代までの伝承者は全てマディーナ在住の人物で、その後の伝承者は全員がクーファ

の人物であるような場合である。

一方でアルハーキムは、「特殊アフラード」を以下の3つの種類に分けている。

- (1) サハーバの一人からマディーナの人々が伝えたもの。
- (2) イマームと呼ばれる博識な学者の一人から、一人の人物だけが伝えたもの。
- (3) マディーナの人々が、他の町の伝承者から伝えたもの。

ただし、この分類はアルハーキム独自のものであることに留意しなければならない。

⑧**ムアツラル**：「欠点となるもの」という意味で、「表面的には問題なしと見られるものの、細部に分け入って検討を加えてみると信憑性を損ねるような問題点が潜在しているハディース」を指し、マールールとも呼ばれる。ムアツラルという判断は伝承経路についても、またハディースの本文についてもなされる。伝承経路についてのムアツラルとは、伝承経路の全体にわたってサヒーフとみなされるべき条件が表向きは備わっているが、複数の伝承経路を比較検討することによってその欠陥が解明されるものである。所在地が遠く離れていて面会した可能性が確認できない者の中で伝えられているハディースや没年差が極端にかけ離れている者の中で伝えられたものや、伝達の事実が確認されない場合もムアツラルとみなされるが、大半のムアツラルは、次のようなものである。

- (1) ある伝承者が単独で伝達しているもの。
- (2) ある伝承者が単独で伝達した際に、実際の内容との間に差異が生じたもの。
- (3) 伝達の途中で、ハディースの本文中に他のハディースの一部が混在してしまったもの。
- (4) 実際にはムルサルだが、伝達の途中で預言者にまで確実に遡るものであるかのように改変されてしまったもの。
- (5) 断絶のある伝承経路が伝達の途中で連続する伝承経路に改変されてしまったもの。

ムアツラルを見破る方法については、「ハディースに潜在する問題点を知る方法は、その経路の収集、その伝達に関わった者たちの相違点についての考察、そして彼らの暗記力の正確さがどの程度のものかについて検証することである。」とアルハティーブ・アルバグダーディーは述べている。

本文におけるムアツラルの例としては、サハーバのアナス・イブン・マーリクが伝える「彼らは(クルアーン読誦の始めに)『讃えあれ、アッラー。万有の主。』から誦み始めていました。そして読誦の始めにも終わりにも『悲深く慈愛遍くアッラーの御名によって』(バスマラ)と誦んではいませんでした。」というハディースがよく引用される。これは礼拝の始めにバスマラ読誦を否定する根拠となっている。この本文はムスリムが単独で伝えているものであるが、アルブハーリーの『サヒーフ集』にも収録されているハディースでは後半部分の「そして読誦の始めにも終わりにも・・・」は記されていない。従ってこの部分がムアツラルとみなされることになる。

⑨**ムドゥタリブ**：「混乱」という意味で、「信憑性の度合いが異なる複数の経路や表現によって伝えられ、どれが最も信憑性が高いものか判断できないハディース」を指す。従ってムドゥタリブには伝承経路におけるものとハディース本文におけるものがある。

伝承経路のムドゥタリブの主なものは以下の通りである。

- (1) 信憑性に疑義が持たれる伝承者を含んでいるが、間断なく連続する伝承経路と、ムルサルが存在する。
- (2) 預言者にまで確実に遡る伝承経路と、サハーバまでしか遡れない伝承経路が存在する。
- (3) 疑義が持たれるが間断なく連続する伝承経路と、伝承経路が全て信頼できる伝承者によるものだがそこに断絶が認められるもの。
- (4) 一部(一人とか二人、または一世代等)のみが異なる複数の伝承経路が存在する。
- (5) 二つの伝承経路のうち一方にしか存在しない伝承者がいる。
- (6) ある伝承者の本名や関連名に差異が認められ、信頼できる者が否かの判断がつかない場合。この点については、さらに以下の四通りの可能性が指摘されている。第一は、一方の伝承経路においては匿名で知られ、他方では本名で知られる場合。第二は、本名と同義語の名詞で伝承者名が示されている場合。例えば本名がムハンマドである伝承者が、別の伝承経路ではマハムードと示されているような場合。第三は、ある伝承者の本名と関連名の双方が知られているものの、その実際の用例に差異が認められるもの。第四は、差異はないと明記されているものの、実際には一方が信頼できる伝承者で他方が信憑性に疑義が持たれる者である可能性が指摘される場合。または一方が常に間断のない伝承経路に現れるのに対して、他方はムルサルの伝達に関わっているという場合。

これらの場合、同じ伝承経路と同じハディース本文がより多く伝えられている方をより正しいハディースと認める見解が主流を占めているが、少数派でもより信頼できる伝承者が多数伝達に関わっている方をより正しいハディースと認めるという見解も強い支持を得ている。

ハディース本文のムドゥタリブについては、上記のムンカルまたはムアッラルについての解説を参照のこと。

⑩ **ムドゥラジュ**：「含まれたもの」という意味で、「伝承経路や本文に何らかの作為が何の説明もなく加えられ、本来の姿から変わってしまったもの」を指す。ムドゥラジュは「伝承経路のムドゥラジュ」と「本文のムドゥラジュ」に分けられる。ほとんどの場合は、ある者がハディースを口述している途中で自分の言葉による解説を付したり、別の話を挟んだために、聞き手が混乱を起こしてムドゥラジュになる。実例が多いムドゥラジュは、以下の4つである。

- (1) 伝承者が解説した言葉がハディースの中に含まれて伝達されてしまったもの。例えばアブダーウードの「スンナ集」に収録されているイブン・マスウードが伝えるハディースでは、「これ(アッラー以外に神はいないということを、私は証言します。」から始まる一連の証言句)を唱えたら、(礼拝は完結したことになります。)それで立ち上がりたのであれば、立ち上がりなさい。座ったままでいたいのなら、座っていないなさい。」となっている。ところが上記ハディースの中で実際に預言者が語った部分は「これを唱えたら、」だけであり、それ以降の「それで立ち上がりたのであれば・・・」の部分はイブン・マスウードによる補足説明である。イブン・マスウードからこのハディースを伝えた者が、預言者の発言とイブン・マスウードの補足説明を併せてハディースとして伝達してしまったのである。

- (2) 異なる二つの経路によって伝えられた一つのハディースが、一方の経路によるものは本文の一部分しか伝えられていないという場合に、他方の経路によって伝えられた本文と換えて伝達したもの。

- (3) ハディースの本文に、他のハディースの本文を付け加えたもの。
- (4) ハディースを伝えたものの伝承経路も本文も様々に異なっているという場合に、個々の相違点を指摘せずに一つの伝承経路によって一つの本文のみが伝えられたかのように示したもの。

⑪ **マクルーブ**：「変形されたもの」という意味で、「伝承経路や本文において実際とは異なる単語が使われたり、単語の位置が変わったりしているもの」を指す。「伝承経路のマクルーブ」としては、「サーリムから伝え聞いた」が「ナーフィウから伝え聞いた」となっていたり、ムッラ・イブン・カアブという名前が別の経路ではカアブ・イブン・ムッラとなっていたりするものがある。また「本文のマクルーブ」としては、「善行をなして、右手がしたことを左手が知らないというほどに、それをひた隠しにする者」というところを「左手がしたことを右手が知らない」となっているものなどがある。マクルーブが意図的なものである場合には受け入れられないが、伝承者の不注意や混乱による場合には、ハディースの受

け入れられる条件に照らしてその信憑性が審査される。

⑫ **シャーツ**：字義的には「孤立しているもの」を意味するが、ハディース学の専門用語としてのシャーツは学者によって様々な定義付けられている。多くの学者は「ある者が単独で伝えたハディースで、その者以上に信頼できるとみなされる複数の伝承者たちによって伝えられたハディースとの間に差異が認められるもの」という定義を支持しているが、アッシャーフィーは「信頼できる伝承者が伝えたハディースで、他の人々が伝えたものとは異なるもの」としている。またアルハーキムは「信頼できる伝承者が単独で伝達に関わっているハディースで、その他の伝承経路では同一のサハービーに遡れないもの」としている。シャーツは原則としてダイーフであるが、例えば「行いは意図に基づく」というハディースのようにアルブハーリーの「サヒーフ集」に収録されたシャーツは、単独でもその伝承者の信憑性が確認されていることでサヒーフとみなされている。

⑬ **検証、補追、補説**：特にダイーフとみなされるような信憑性に疑義が持たれるハディースについては、そのハディースが伝えられた複数の伝承経路を収集し、その全ての信憑性について精査な検証を行う必要がある。「検証」(イアティバル)とは、科学的検査の手法を用いて伝承経路の拡散状況を実証した結果、知られている伝承者以外に信頼できる伝承者を見出さなかったことを意味する。「補追」(ムターバート)とは、検証に基づいて得られた結果、当該のハディースをある伝承者から伝えた伝承者が複数確認されたことを意味する。一方あるハディースと意味するところだけ一致する別のハディースが伝えられている場合で、補追に該当しないのであれば「補説」(シャーヒド)とみなされる。

⑭ **スィカ(信頼できる伝承者)への追加**：スィカたちによって伝えられたハディースに、意図的に何らかの改変追加がなされたものを言う。スィカへの追加はハディースの本文と伝承経路の双方か、あるいはいずれか一方に対してなされる。こうした追加は、別のスィカたちによって伝えられた同一内容のハディースとの相違によって知られる。イブヌッ・サラフはスィカと認められる伝承者によるスィカへの追加は容認されるとしているが、その認否については学者たちの一致した判断はない。またスィカへの追加がスィカたちによって伝えられたハディース、あるいはより信頼できる伝承者らによって伝えられたハディースとは大きく異なる場合には破棄される。伝承経路に対するスィカへの追加の大半は、スィカたちによって伝えられた伝承経路に間断が認められる場合、それに連続性を持たせるための作為である。条件付きでスィカへの追加を認める上記以外のハディース学者の見解として、アッサイラフィーとアルハティーブ・アルバグダーディーはそうした追加がハディースをよく暗記している者によって為されたとし、またイブヌッ・サッバグは、そうした追加が一人の手によって為されたのではないとしている。彼はまたハディースからの削除が為される場合には、信頼できる者であったとしても一人の手によるものは認めず、疑義が持たれていない複数の伝承者によって為されていることを条件としている。その他にも、意味のみの追加は認められないとか、法的判断を含む場合の追加のみが認められるとか、伝達に際して一切の省略をしていない者による追加は認められる等の見解がある。

⑮ **マウドウウ**：「下に置かれた」または「貶められた」という意味のアラビア語で、ハディース学においては改竄されたハディースを指す。改ざんが認められたハディースは、それが改竄されたものである旨を明記せずには、引用することも伝達することも非合法的行為とみなされる。改ざんを見破る方法として、以下の4つがある。

- (1) ハディースを改竄した者が自ら改竄の事実を認めている。例えばヌーフ・イブン・アビーマルヤムという人物は、クルアーンの各章についてその功德に関するハディースを改竄して伝えたことを告白している。
- (2) ハディースの信憑性の程度を検証している過程で改竄の事実が知られる。例えばウバイユ・イブン・カアブによるクルアーンの各章の功德についてのハディースの改竄は、この方法によって知られた。
- (3) 伝承者の置かれた立場から改竄の事実を推論する。ギヤース・イブン・イブラーヒームが時のアッバース朝第3代カリフ・アルマハディーに取り入れられるために行ったように、時の為政者を称賛したり納得させたりするために成された改竄の多くは、こうした推論によって知られることになった。
- (4) 伝達されたハディース本文の表現やその意味を点検する過程で改竄の事実が知られる。

東南アジアハラール認証団体訪問の記

イスラーム研究センター・シャリーア専門委員会委員長 武藤英臣

2006年8月31日から9月12日まで、シンガポール、インドネシア(ボゴール)、マレーシア(プトラジャヤ)、台湾(台北)を訪ねハラール認証団体関係者と意見交換をした。これはその概要記である。

シンガポール MUIS訪問

9月1日から3日間にわたって開かれたJAMIYA (Muslim Missionary Society Singapore) セミナーに参加していた台湾と韓国の人たちと3名でMUISハラール担当者で面談した。

シンガポールは、1963年のマレーシア連邦結成に参画したが1965年にそこから分離独立した国である。人口は440万人、その大多数を占める中華系は仏教、道教やキリスト教徒である。15%を占めるマレー系は殆どがイスラーム教徒であり、国民の中にヒンズー教徒も8%余いる。このようなことでマレーシアと異なり、シンガポールはイスラームを国教としていない。

MUISはシンガポールイスラーム評議会 (Majlis Ugama Islam Singapura) の略で、政府の地域育成、青少年、スポーツ省の管轄下にある。これは1968年施行ムスリム身分法 (Administration of Muslim Law Act) に基づき、国内のイスラームに関する案件を国家元首に助言する機構として設置された。その機能は、シンガポールムスリム国民からのザカートの徴収と配分、ワカフ管理、マッカ巡礼、ハラール認証発給、ムスリム国民へのイスラーム教育と非ムスリムへのイスラーム啓蒙、モスク建設・維持管理、イスラーム教育機関の運営管理、ファトワの公布、貧窮ムスリム救済、イスラーム団体の育成と広範囲にわたる。しかし数年前まで、MUISはその権限や機能を十分に発揮することはなかった。国内では、イスラーム諸団体独自の活動の影に隠れた存在であった。例えば、イスラーム団体の一つで、独立前に創立されたJAMIYAH (1961年登記)は、海外のムスリム慈善家から支援を受け、イスラーム教育の実施や養老院、孤児院を運営し、独自のモスクを建てイマームを擁している。国内法でいえば、MUISの監督下にある筈であるが実質的には独自の予算を持ちMUISの世話になっていない。

しかし、近年、企業のハラール認証発給要請の増加に伴い、急激にMUISは力をつけてきた。ムスリム身分法によって「ハラール認証」はMUISの独占的権限であるからだ。食生活に関するシンガポールムスリムはMUISのハラール認証機能を知っていたが、ハラール食の摂取は個人の責任で行なうべきものと考えていた。また、それぞれが所属するイスラーム団体がMUISの判断を得ることなく、それぞれの構成員にアドバイスしてきた。

シンガポール共和国の国際的地位が上がるにつれてMUISのシンガポール国内に於ける役割 (ハラール認証発給) が重要になってきた。シンガポールが国際流通のハブ機能を強めれば強めるほど、ハラール認証発給要請が増加する。

MUISはマレーシアのハラール認証システムに倣っていたが、海外での、自国輸入産品審査までは行っていなかった。国民がそれを要求していなかったことと国内消費はシンガポールを通過する産品量に比較して僅かではなかった理由による。一方マレーシアは、自国ムスリムの食の安全のため輸入産品のハラール性確保の必要に迫られ、マレーシア輸入品の生産国や輸出先まで審査に出向いていた。この状況が変わったのは、2005年7月10日付けJAKIM省令である。JAKIMは、それぞれの国におけるハラール認証団体がマレーシア基準をクリアしていればその認証を受入れることにした。このことは、MUISが認証した物はJAKIMも受入れる、即ちシンガポール認証はマレーシア認証と同効力あることとなった。

MUISは忙しくなった。書類審査から現場査察、イスラーム知識啓蒙、アドバイス、訓練に忙殺されている毎日だと言う。

MUISのハラール認証申請手続きは大きく分けて四つある。1) 食肉屠畜用、2) レストラン用、3) ホテルや仕出の調理場用、4) 最終製品用である。その手続きや審査、経費を細かく定めている。認証取得までの時間も二種類あり「通常手続き」が100ドルの場合、「至急手続き」は75%アップである。ハラール認証有効期間は1年の場合と2年の場合がある。

MUISは食品科学や工学技術、イスラーム法を習得した若手を採用し、ハラール認証発給体制完備を目指している。さらに、南アフリカ、欧州、米国等、海外のあらゆるハラール・セミナー、展示会、シンポジウムへ積極的に参加し、MUISのハラール認証手続きをアピールしている。MUISは最近独立特別行政法人に移行したという。今後このMUISの動きを注目する必要がある。

インドネシア LPPOM-MUI訪問

インドネシアのハラール認証団体で一番有名なものはインドネシア・イスラーム学者評議会附属食品薬品化粧品検査研究所 (LPPOM-MUI) (英文ではAssessment Institute for Foods, Drugs and Cosmetics, The Indonesian Council of Ulama = AIFDC-ICU) である。創立は1989年、ジャカルタにあるイスティクラール・

モスクに本部事務所を持つ。作業事務所と研究所はボゴール農業大学キャンパスの一角にある。

今年、LPPOM-MUIの第17回創立記念ハラール研究会が1月30日ジャカルタで開催された。ゲスト・スピーカーとしてオランダのハラール食品・飼料検査協会会長、日本から私自身、南アフリカハラール認証協会のNavlakhy氏がそれぞれ自国の認証方式を説明し更に世界のハラール認証団体との連携を強調した。LPPOM-MUI所長のアーイシャ博士は、国立ボゴール農業大学の教授であったが、最近定年退職した。同女史に育てられた後進がハラール審査、調査を行なっている。また国内各地へ出掛けハラール啓蒙活動を行なっている。

同女史は、インドネシア国内のハラール認証分野では教祖的な立場で、彼女にものを言える者はいないとインドネシアハラール関係者は言っている。現在も世界ハラール評議会 (WHC) の議長を務めている。

私との面談の中で、アーイシャ女史は、世界的にハラール問題が取り上げられてきたことは大変喜ばしい。世界最大のムスリム人口を擁するインドネシアがハラール問題で指導的な立場に立つことは義務であり、今後もLPPOM-MUIはその役割を果たして行くつもりだ。世界の認証団体が国際的な基準でハラール認定することが望ましい。拓殖大学イスラーム研究センターで審査・認証されたハラール認証製品は大いに安心であり、LPPOM-MUIも更なる協力関係を約束する。日本人ムスリムの増加とイスラーム研究センターの発展を祈る旨コメントあった。

マレーシア JAKIM訪問

マレーシア連邦政府イスラーム開発局 (JAKIM) を訪ねた。マレー語の頭文字でJAKIMと呼ばれ、同局のHalal Development 部でハラール認証を発給している。

部長との面談で、私から、最近、ペット・ボトルのミネラル・ウォーターにハラールマーク付が出回っているが元来、真水/飲料水はハラールである筈なのに、それにハラールマークを付けることは行過ぎではないかと質問した。

同部長は、飲料水はハラールであるから、ハラールマークは不要であることを以前から説明してきた。しかし、企業は、自社の水が、地下からくみ上げられ、飲料用としてボトルングされる全工程にハラール性があることの証明が欲しいと要請してくるので、JAKIMとしても企業側の要請に応え、審査のうえハラール認証を発行している。マーケットがハラールマークのあるものを求め、ハラールマークの無い製品の売上げが激減していることが理由である、との説明があった。



MUISハラール責任者 (左側2人目)

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究センター
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: <http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/>

拓殖大学 イスラーム研究センター ニュースレター

平成18年12月15日発行
発行人 拓殖大学イスラーム研究センター
編集人 イスラーム研究センター主任研究員
柏原 良英

タフシール（クルアーン解釈）研究会報告

イスラーム研究センター主任研究員 柏原良英

はじめに

今年の当研究センターの行事としてイスラームの基礎であるクルアーン
の理解を深めることを目指しアラビア語のタフシールを通してクルア
ーンを見てみることを計画した。取り掛かりとしてクルアーン的第一章と
第二章を選んで4回に分けて読んでいくことにした。研究の発表は公開して
一般の人にもクルアーンに接する機会を設けた。初回は6月24日に行い、
森センター長がクルアーンの基礎とタフシールの意義について話し、私が
第一章のファーティハ（開端）章の解釈を行った。今回はこの第一章の解
釈をお伝えしクルアーンにはどのようなことが書かれているのかその一
端でも知っていただければと思う。

1. 第一節 ビ・スミッ・ラーヒッ・ラフマーニッ・ラヒーム 慈悲深き慈愛あまねくアッラーの御名において。

クルアーンはアラビア語で書かれたものである
ためその和訳は、正式にはクルアーンと呼ばずに
解釈書と呼ばれる。上記のカタカナ部分は本来詠
まれるアラビア語クルアーンを参考のためにでき
るだけ原音に近いカタカナ表記したものだ。

この節はバスマラと呼ばれクルアーンの大部分
の章の始めに置かれているが、この章以外は一節
と数えていない。出だしの(ビ)は(～によって)と
いう前置詞で後の(スミ)によってということ。(ス
ミ)は本来(イスマ:名前)であるが(イ)が省略さ
れて読まれる。その後の(ラーヒ)はアッラーでア
が省略されて読まれる。つまり「アッラーの名前で」という始まりになる。
ムスリムは行為の始めにこのビスムッラーを言ってから行動する。これ
から読むクルアーンはアッラーの言葉でありその名前によって読み始める
という宣誓である。次の(ラフマーニ)と(ラヒーム)は同じ慈悲を与える
者という意味で、文法的にはアッラーの形容詞になるが同時にアッラーの
性質を現す99のアッラーの美名の一つでもある。この二つの違いはラフ
マーニは創造主であるアッラーが創った全てのものに慈悲を与える者
という意味で、ラヒームはアッラーを受け容れる者に慈悲を与える者とい
う違いであるが、アッラー性質としてまず慈悲が有ることはイスラームを理
解する上で重要であろう。

2. 第二節 アルハムド・リッラーヒ・ラッピル・アーラミー 万有の主、アッラーにこそすべての称賛あれ。

アルハムド:アルは定冠詞でハムド(称賛)を限定して文の主語を表す。
同時にここではあらゆるという意味。ハムドは感謝や称賛。文章は普通の
記述文だが意味は祈願。リッラーヒ:リは前置詞。所属を示す。アッラーだ
けに属する意味。ラッピル:主。アッラーと同格でアッラーの主性を示す。こ
れは主人に通じ信者は支配される奴隷のような関係を表す。アーラミー

ン:世界(アラーム)の複数。人間だけではない植物、動物などあらゆる世
界。先の主がこのアラミーによって限定される。アッラーはあらゆる
世界の主であることの表明。

3. 第三節 アッラフマーニッ・ラヒーム 慈悲深き慈愛あまねく御方
一節目と同じ。再度アッラーの基本的な性質を表わす。

4. 第四節 マーリキ・ヤウミッ・ディーン 最後の審判の日の主宰者
マーリキ:所有、支配する者。ヤウミ:日の。ディーン:最後の審判。前節
では現世におけるアッラーの立場を表現するがここでは来世、死後復活し
た人間が受ける審判の支配者であることを表わす。イスラームは来世こ
そ永遠の生が約束された場所として重要視する。

5. 第五節 イーヤーカ・ナアブド・ワ・イーヤーカ・ナスタイーン 私
達はあなたにのみ崇め仕え、あなたにのみを御助けを請い願う。

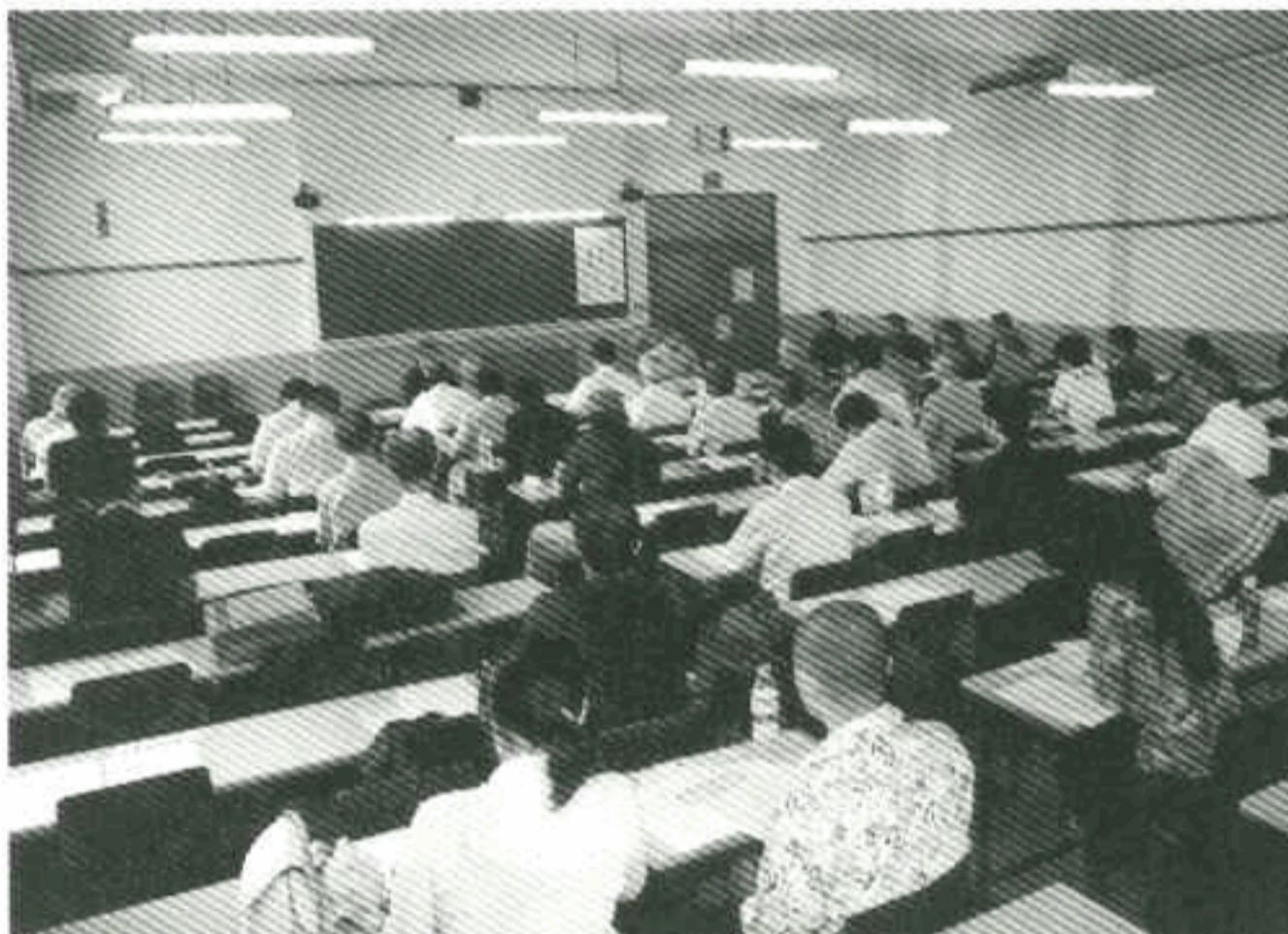
イーヤーカ:(カ)あなたを。イーヤーは本来目的語の力を最初に持って
くるために加えられるもの。ここではあなただけと言う強調。ナアブド:我々は仕える。この
元のアブドというのは奴隷を意味し、先ほどの主人とつことになる。アッラーに対する信者の態度。
次のイーヤーカも強調。ナスタイーン:我々は助けを求め。信仰も援助もその対象は唯一の神
アッラー以外にはないことの表明。

6. 第六節 イフディナッ・スィラータル・
ムスタキーム 私達を正しい道に導きたまえ

イフディナ:イフディが導いてくださいという祈
願。ナは私達を。スィラータ:道へ。ムスタキーム:真直ぐな。道を形容す
る。このまっすぐな道はイスラームを示し、そのたどり着くところは来世
における天国(ジャンナ)である。また直線は二点を結ぶ最短距離を表わ
し、来世における幸福に至る最短の方法がイスラームの道であることを
言う。

7. 第七節 スィラータッ・ラズィーナ・アンアムタ・アライヒム・
ガイリル・マグドゥービ・アライヒム・ワ・ラッ・ダーツリーン
あなたが御恵みを下された人々に、あなたの怒りを受けし者、ま
た踏み迷える人々の道ではなく。

スィラータ:道。前の道の説明。ラズィーナ:関係代名詞複数を表わす。
アンアムタ:あなた(アッラー)が恵みをお与えになった。アライヒム:アラ
イは上。ヒムは彼ら。アッラーが恵みを与えた人々の道となる。ガイリ:
否定。～ではない。マグドゥービ:怒りを被った。アライヒム:彼らの上に。
怒りを被ったのはユダヤ人という解釈もある。ワ:また。ラ:否定。～では
ない。ダーツリーン:迷える人々。一説ではキリスト教徒。アッラーが与
えた恩恵に、純粋に唯一の神として受け入れ感謝してきた人々と同じ道へ道
へ導いてほしいという祈りで終わる。



タフシール研究会会場風景